



「学びの中動態」の必然性：予測不能な時代を生き抜くための新たな学力観

研究会で議論された「学びの中動態」は、現代社会が直面する予測不能な課題や AI 時代の到来といった変化の中で、従来の学力観だけでは捉えきれない、より本質的な学びのあり方を明らかにする、不可欠な学力観です。この学力観は、単に知識や技能の習得に留まらず、学習者が予期せぬ出来事や偶発的な出会いの中で学びを柔軟に変化させ、新たな意味を創造していくプロセス、そして全人的な成長を促す学びを捉えることを目指しています。

しかし、「学びの中動態」の視点だけでは、教科教育で育成すべき資質・能力、特に認知スキーマや鍵概念、教科独自のアプローチが疎かになる懸念もあります。「学びの中動態」はあくまで学びの生成プロセスや全人的な側面に焦点を当てますが、それがどのような内容や方法で深まるのかという点においては、教科教育の知見が不可欠です。本研究では、「学びの中動態」を追求する中で、教科固有の資質・能力との接続を意識し、どのようにして教科の知識や技能が予測不能な学びの中で活用され、あるいは新たな発見へと繋がるのか、その相互作用を具体的に明らかにしていく必要があります。

「学びの中動態」がなぜ不可欠なのか：現代教育の根幹的な問題への視点

研究計画書が示すように、「学びの中動態」は、従来の学力観だけでは捉えきれない、現代の予測不能な社会を生きる子供たちにとって不可欠な、より本質的な学びのメカニズムを明らかにします。本研究が特定する以下の3つの現代教育が直面する根幹的な問題意識を踏まえ、「学びの中動態」がなぜ不可欠な学力観であるかを明確にしていきたいと思います。

問題 A： これまでの学校教育は、自立した学習者を十分育てられていなかった。

問題 B： AI 時代を強く生きる子を育てるための教育現場はまだ手探りの段階である。

問題 C： 過度な再現性追求により、子供の創造性や多様な考え方を阻害しているケースがある。

1. 「予測不能な学びの生成プロセス」への着目：VUCA 時代への対応

「主体的な学び」や「探究」は、学習者の明確な意図や目的を起点とする重要な学力観です。前者は「学習者が意図をもって自ら計画し、実行していくプロセス」に、後者は「特定の問いやテーマに対し、目的をもって深く掘り下げ、新たな知見や解決策を見いだすプロセス」に焦点を当てています。

これに対し、「学びの中動態」は、「学習者と環境、他者との予期せぬ相互作用の中で、学習の方向性が変化したり、内容が深まったり、あるいは新たな問いが生まれたりする予測不能な学びの生成プロセス」にスポットを当てます。「現代社会は VUCA の時代である」と表現されるように、このような時代において、あらかじめ設定された目標や問いに沿ってのみ学ぶ力だけでは不十分です。子供たちは、予期せぬ出来事や偶発的な出会いの中で、自らの学びを柔軟に変化させ、新たな意味を創造していく力が求められます。この「予測不能な生成」という側面に焦点を当てることこそが、「学びの中動態」の独自性であり、従来の学力観では捉えきれない、現代に不可欠な学びの新たな側面を明らかにします。

例えば、「風の show タイム」では、子供たちが風という予測不能な自然現象と出会い、自らの身体や感覚を通して風を感じ、その動きや力を表現しようとしていました。この過程で、子供たちは風の性質を理解するだけでなく、自分なりの意味や価値を発見したり、他者との協働を通して表現を豊かにしたりと、予期せぬ学

びを生み出していました。

2. 「自己調整学習」が捉えきれない流動的な学びのプロセス：問題 A への解決

本研究計画書では、「主体的な学び」と関連の深い「自己調整学習」について言及し、その限界を指摘しています。自己調整学習は「想定した目標に向かって学びを調整する力」という強みを持つ一方で、「メタ認知の曖昧さや、学習を取り巻く広範な要因を十分に捉えきれない側面」という課題があります。これは、従来の学校教育が自立した学習者を十分に育てられていなかったという問題 A にも繋がるでしょう。

これに対して、「学びの中動態」は、「学びの過程でひと・もの・ことによって学び方そのものが流動的に変化していく」という視点に立っています。これは、学習目標が変化したり、学習過程において予期せぬ出来事が起こったりするような、より動的な学習状況において、学習者が主体的に学びを変化させ、新たな知識や意味を構築していく過程を捉える上で重要です。

つまり、「主体的な学び」が「目標達成に向けて自身の認知活動や学習行動を意図的に調整・管理する機能」に焦点を当てるのに対し、「学びの中動態」は、その意図や目標すらも変化しうる、より広範で流動的な学びのプロセスを捉えようとしています。この点で、自己調整学習の限界を超え、自立した学習者の育成という問題 A への具体的な解決の方向性を示してくれるものと捉えています。

3. 全人的な成長を促す「学びの中動態」：問題 B と C への対応

「学びの中動態」は、子供たちの全人的な成長を包含する概念です。研究計画書では、「学びの中動態」が、「知識や技能の習得といった認知的な変化に留まらず、学習への意欲や態度の変化といった情意的な側面、そして他者との関わり方や社会性の発達といった社会的な側面を含む、全人的な成長を意味する」と述べています。感情の揺れ動き、他者との共感、そして自己変容といった、人間ならではの豊かさを本研究では重視します。

AI が飛躍的に進化し、AI には代替できない人間の創造性や共感性、倫理観といった「人間性」がますます重要となる中（問題 B）、また、過度な再現性追求が子どもの創造性や多様な考え方を阻害する可能性を指摘する（問題 C）中で、「学びの中動態」は、まさにこの全人的な成長を促すための鍵となる学力観です。それは、認知能力と非認知能力が相互に影響し合いながら、学習プロセスの中で統合的に伸びていく様を捉えようとするものです。この全人的な成長の視点に立つことで、子供たちは単なる知識の受け手ではなく、自らの感情や他者との関係性の中で学びを深め、より創造的で多様な考え方を発揮できるようになります。これは、AI 時代を強く生き抜くための、人間ならではのしなやかな強さを育むことに繋がります。

4. 「真の探究」と「学びの中動態」

これまで述べてきた「学びの中動態」が捉えようとしている学びのメカニズム、特に予測不能な学びの生成プロセスへの着目、流動的な学びのプロセスを捉える視点、そして全人的な成長を促す側面は、私たちが前研究で目指していた「真の探究」と究極的には同じ地点を指し示しているのかもしれませんが、「真の探究」が単なる知識の獲得に留まらない、内面的な変化や新たな問いの生成、そして社会との関わりの中で自己を再構築していくような深い学びを目指していましたが、「学びの中動態」は、その「真の探究」が起こるメカニズムや、偶発性を含む過程をより精緻に、そして包括的に捉えるための学力観として位置づけられるでしょう。つまり、「学びの中動態」は、「真の探究」という理念を具体的な学びのメカニズムとして可視化し、教育実践へと落とし込むための理論的枠組みとなる可能性を秘めていると言えます。本研究では、この「学びの中動態」と教科教育における資質・能力育成の接点を深掘りすることで、未来の学びをより豊かにする実践的な知見を導き出したいと考えています。

（木村 仁）